9．中世城郭の新知見

多くの中世城郭や中世城館の調査も行われています。その中でも、丘陵上に造られた室町時代後期の大津市関津城遺跡と生津城遺跡が注目されます。

関津城遺跡では、丘陵上に敵の侵入を防ぐための土塁や斜面を削って造った切岸で囲まれた３つの区画（曲輪）が見つかっています。曲輪の内には、門跡、礎石建物跡、井戸跡、火災を受けた蔵跡があり、土師器の皿、貯蔵用の陶器、中国・朝鮮の陶磁器や金属製の装飾品の金具などが出土しており、丘陵の城郭の様子がよくわかる例です。

一方、生津城遺跡は、丘陵上に立地し、堀切と土塁で囲まれた曲輪内から石垣をもつ櫓台、蔵と考えられる礎石建物跡が見つかっています。これらの遺構からは日常の陶器や輸入陶磁器など出土しています。特に櫓台の石垣は、40cm前後大きな石を積み上げ、その裏込め15cm程度の石を用いていることから、城に石垣を導入し始めた時期の貴重な例です。

曲輪全景
（大津市関津城遺跡
室町時代後期）

櫓台跡と礎石建物跡（大津市生津城遺跡　室町時代後期）

10. 日本最古の貨幣

708年（和銅元年）に発行された和同開珎に先立つ貨幣で、銀製で銭面に文字がないことから無文銀銭と呼ばれています。奈良やその周辺から出土しています。

滋賀県では、大津市崇福寺塔跡、大津市唐橋遺跡、守山市赤野井湾遺跡、甲良町尼子西遺跡、栗東市狐塚遺跡、栗東市霊仙寺遺跡などで出土しています。

無文銀銭
（甲良町尼子西遺跡　飛鳥・奈良時代）

11. 集落出土の石釧

石釧は腕にはめる環状の装身具で、古墳時代前期には、古墳の副葬品として使われています。

高島市上御殿遺跡では、古墳時代後期の川跡から破片の状態で出土しています。この川跡から出土した木製祭祀具と共に水辺の祭祀に使用された可能性が考えられます。

石釧
（高島市上御殿遺跡　古墳時代後期）

12. 遺跡から見つかった地震跡

平成年間には、阪神・淡路大震災、東日本大震災と２度の大きな地震が起こりました。こうした地震の跡が遺跡の中にも残されています。

炉跡が地震によって段差ができたり、砂が地表面に噴き上がる噴砂などが全国各地で見つかっています。遺跡から発掘される地震の跡は、およそ何年前にどれぐらいの大きさの地震があったことがわかります。こうした遺跡は、現在の防災の観点からも重要な記録であるといえます。

噴砂跡（高島市針江浜遺跡　弥生時代中期）

埋もれた文化財の話 41
令和2年（2020）9月
編集・発行　滋賀県埋蔵文化財センター
〒520-2122　滋賀県大津市瀬田南大萱町 1732－2
TEL（077）548－9681　FAX（077）548－9682
E-mail shigamaibun-center@guitar.ocn.ne.jp
URL　http://www.shiga-mc.sakura.ne.jp/

平成の発掘成果から滋賀県の歴史を垣間見る
－古墳～室町時代編－

はじめに

滋賀県埋蔵文化財センターのある瀬田丘陵は、奈良時代には近江国庁が造られ、飛鳥時代から奈良時代にかけて鉄を作り、土器を作った遺跡が多くあります。こうした遺跡の一部は、平成時代に発掘されました。今回は、瀬田丘陵の遺跡を含めた平成時代に発掘された古墳時代から室町時代について発掘調査の成果を紹介します。

1．古墳に見る渡来系遺物

湖西南部地域や湖東地域は、文献資料から渡来人の存在が確認されている地域です。特に湖西南部地域では、朝鮮半島の遺跡と類似する暖房施設のオンドル遺構が見つかった大津市穴太遺跡や瀬田川底から出土した勢多橋の橋脚など渡来人との関わりが強い遺構が見つかっています。

大津市穴太飼込古墳第13号墳では、古墳時代後期の横穴式石室から須恵器の高坏や壺のほか、土師器のミニチュア甑や、移動式竈などの炊飯具が出土しています。ミニチュア炊飯具は、この地域の古墳群からしか出土しない副葬品で、古墳時代に朝鮮半島から導入された炊飯のミニチュア土器という点で、渡来系要素の強い遺物と考えられています。

一方、湖東地域の犬上川流域左岸の犬上郡甲良町付近では、一般的な須恵器の壺とは違う底が平らな徳利型平底壺と呼ばれる変わった壺が出土しています。この壺に類似した壺は朝鮮半島から出土しており、渡来人がこうした壺を必要としていた可能性があります。また、甲良町尼子遺跡では、飛鳥時代中頃の古墳の周溝から炉壁や鉱滓が出土しており、金属生産にも渡来人がかかわったのかもしれません。

土師器ミニチュア炊飯具と須恵器・鉄釘
（大津市穴太飼込古墳第 13 号墳　古墳時代後期）

須恵器徳利形平底壺
（甲良町小川原遺跡　古墳時代後期）

2．埴輪と木製立物

古墳に並ぶ埴輪は有名ですが、粘土から作られた埴輪と共に木製の埴輪ともいうべき木製立物の出土が見られます。彦根市肥田町に所在するの塚乞手古墳は、周濠から多数の円筒埴輪と鳥形と笠形の木製立物が出土しています。

円筒埴輪と木製立物
（彦根市塚乞手古墳　古墳時代後期）

鳥形は、方孔が上下に貫通し、上方には浅い凹みがあります。上下の孔には、古墳に樹立するための支柱を挿入し、上方に別作りの翼を組み合わせていることから、鳥が空を飛んでいる様子を表していると考えられます。

3．木製祭祀具と水辺の祭祀

高島市上御殿遺跡では、昔の川で行われた木製祭祀具を用いた水辺の祭祀跡が見つかっています。

上御殿遺跡では、古墳時代は、木製の刀形代を使って、悪霊などを追い払い、律令国家が成立した奈良時代以降では木製人形代に自らの穢れを移す現在の大祓の行事の原型へと変化しています。このように祭祀の道具は、意味を変えながら平安時代までの長い期間（約600年間）、同じ川辺で水辺の祭祀が行われたことがわかってきました。

木製祭祀具　左：刀形･舟形・斎串・琴　右：人形・馬形・舟形ほか
（高島市上御殿遺跡　左：古墳時代後期　右：奈良・平安時代）

4. 国庁・頓宮の新知見

滋賀県の奈良時代の県庁にあたる大津市近江国庁跡の発掘調査では、昭和40年の発掘で見つかった政庁の東側から奈良時代後半の大型建物の基壇が見つかりました。この建物の北側に炊飯を行った空間の存在から、この大型建物では、儀式や饗宴が行われたと考えられています。

この調査結果から奈良時代の近江国庁は、全国的にも珍しい政庁を挟んで、東西を築地塀で囲った３つの空間をもつことがわかりました。さらに、国庁の造営に当たっては、周辺の谷を埋める大規模な造成工事を行っていたことも明らかになりました。

平成の新たな発見としては、近江大橋にほど近い大津市膳所城下町遺跡から奈良時代前半の大型建物が見つかりました。この建物は身舎の両側に２面の庇が付く床面積約247.5㎡の立派な建物で、柱穴の大きさが大人の身長程度の一辺約1.6mで、柱の直径が約40cmと考えられています。

このような立派な建物は、宮殿や平城宮内の官衙正殿などに類似した格式の高い建物です。建物の年代、規模、短期間で解体された点から聖武天皇の東国行幸に伴う『続日本紀』に見られる禾津頓宮の可能性が考えられます。

東郭全景　　東郭整備工事後全景
（大津市史跡近江国庁跡　奈良時代から平安時代）

２面庇付掘立建物跡（大津市膳所城下町遺跡　奈良時代）

5. 古代の金属生産

近江国庁がある瀬田丘陵では、奈良時代に律令国家の重要な生産物である鉄・鉄製品や須恵器などの土器作りの施設が造られており、一大工業地帯の様相をしています。

こうした一大工業地帯の一角にある草津市木瓜原遺跡では、奈良時代初め頃の製鉄・鋳造・製陶を行う複合生産施設が見つかりました。このうち製鉄に関する施設として、鉄鉱石から鉄を作る製鉄炉、製鉄炉でできた鉄塊の良い部分を抽出する小割場、製鉄炉でできた鉄を再び加熱して鉄の素材を作る大鍛冶場と鉄の製品を作る小鍛冶場など、鉄から鉄製品を作る一連の工程がこの遺跡で見つかっています。また、梵鐘を鋳造した跡も確認されました。

また、奈良時代には瀬田丘陵の縁辺部では、多くの遺跡から金属製品の鋳造遺構や鋳型が見つかっていることから、金属製品やガラス製品などを造っていたことがわかっています。

珍しい例では、大津市関津遺跡から和同開珎の不良品を鋳造の材料としてリサイクルした遺構も見つかっています。

製鉄炉と小割り場（草津市木瓜原遺跡　奈良時代）

梵鐘鋳造遺構（右）
製鉄炉復元模型（左）
（草津市木瓜原遺跡　奈良時代）

6. 古代の土器づくり

縄文土器に始まる土器は、当初、野焼きで作られます。古墳時代の半ばになると、窯を使用した強い火力で作られた須恵器が作られるようになります。奈良時代には、国庁や関連施設が瀬田丘陵に造られることに併せて、多くの須恵器の窯が造られます。さらに、平安時代になると釉薬をかけた緑釉陶器や灰釉陶器の窯が甲賀から東近江かけての地域で作られるようになります。

木瓜原遺跡では、奈良時代の須恵器窯で、坏・鉢・甕・壺などの日常的に使用する須恵器に加えて、墨を磨るための円面硯なども作られています。この窯からは、製品になったもの以外にも、へしゃげて実用にならない須恵器や複数がくっついた須恵器も多く見つかりました。

平安時代の甲賀市春日北遺跡の窯では、緑釉陶器の椀など製品のほか、焼く時に重ねた陶器が釉薬によってくっついてしまわないようにするために使うトチンという道具も出土しています。

須恵器窯（草津市木瓜原遺跡　奈良時代）

緑釉陶器窯出土遺物（甲賀市春日北遺跡　平安時代）